

## つくしだよりから

### 真夏の昼の夢

八月下旬の午後、牧師館前の坂道から子どもたちの声がとぎれとぎれに聞こえてくる。どうしたんだらう？

外に出てみると、年長のK君とRちゃんの坂道を駆けのぼる後ろ姿。しばらくして、今度は走り降りてきた。

「何かご用事かな？」首を横にふる二人。

そして、もう一度駆けのぼり、また降りてくる。

「何してるん？」「リレー！」（えっ、この暑いのに？）でも、すぐピンときた。「桐生くんの、あの銀メダル？」

「そう〜」といって、また駆けのぼっていく。リオ五輪男子四百リレー。確かに格好良かったもんな〜

次の日、ざわめき声が増えている。外にでると、仲間が加わったらしい。ふだん園長の顔を見れば、じゃれたり話しかけてくる子どもたちなのに、なぜか皆ただもくもくと走り続けている（不思議…）分かっているがみんなに尋ねてみる。「何してるん？」「リレー」。ゆるやかに曲がる坂道はそういえば競技トラックに

も見える。あまりに真剣なので、いたずら心で言ってみた。「バトンは？」。

走る足がぱたりと止まった。一瞬、まずい、という表情。手が空だったのだ。とぼとぼ、みな園庭に帰っていく。「悪いこと言ったかなあ？」

しばらくして、ざわめき声が復活。K君の手には真新しい青竹の筒が。竹細工の岩本さんが先日作ってくれた水鉄砲の胴体を借用したらしい。よく考えたなく。大人にとってはたわいもない、リレーごっこ。でも、子どもにとっては、憧れの選手になれる最高の時間。きつとマラカナン・スタジアムの大歓声が聞こえていたにちがいない。

そんな日々が約一週間。気がつくともう声は聞こえなくなっていた。自分で始め、工夫して、一つの遊びを思う存分やりつくした満足そうな表情。これこそ今の子どもたちに一番必要な時間なのかもしれない…

そう思つて耳を澄ますと、秋の虫が鳴き始めていた。